

# On the topology in Stein algebras

千葉大 教育 鷓 沢 正 勝

## § 1. 序

$(X, \mathcal{A})$  を Grauert [8] の意味の解析空間とし,  $X$  は可算位相をもつとする.  $\mathcal{F}$  を  $X$  上の任意の連接解析層とすると,  $\mathcal{F}$  は Frechet 層となり,  $X$  上の任意の開集合  $W$  に対して,  $W$  上の  $\mathcal{F}$  の切断の全体  $\Gamma(W, \mathcal{F})$  は Frechet 空間となる (定理 1 系). この位相は,  $X$  が reduced な場合と違って,  $CU$  位相ではない.

$\mathbb{C}$  上の位相環は, ある Stein 空間  $(X, \mathcal{A})$  があって, 位相環  $\Gamma(X, \mathcal{O})$  に同型であるとき, Stein algebra という.  $X \subseteq \mathbb{C}^n$  の正則領域とし,  $\Gamma(X, \mathcal{O})$  を  $X$  上の正則関数全体とすると, Cartan 及び # 等は次のことを証明した.

1.  $\mathcal{O} \in \Gamma(X, \mathcal{O})$  のイデアルとし,  $\mathcal{O}\mathcal{O} \in \mathcal{O}$  から生成されるイデアルの層とすると,  $\Gamma(X, \mathcal{O}\mathcal{O})$  は  $\mathcal{O}$  の閉包  $\bar{\mathcal{O}}$  に等しい [2].
2.  $\mathcal{O}$  がとくに有限生成的なら,  $\mathcal{O} = \bar{\mathcal{O}}$  である [2].
3.  $\mathcal{M} \in \Gamma(X, \mathcal{O})$  の極大イデアルとすると, 次の条件は同値である: ④.  $\Gamma(X, \mathcal{O})/\mathcal{M} \simeq \mathbb{C}$ . ⑤.  $\mathcal{M}$  は  $\Gamma(X, \mathcal{O})$  の閉イデアル.

(v). 一点  $a \in X$  があり,  $\mathcal{M} = \{f \in P(X, \mathcal{O}) \mid f(a) = 0\}$  [9].

この小論の目的は上の定理を一般の Stein 空間  $(X, \mathcal{O})$  即ち Stein algebra にまで拡張することである (定理 2.3, 5). 更にこれらが Stein 加群にまで拡張されることを示す.

## § 2. Frechet 層

以下  $(X, \mathcal{O})$  と書いたら Grauert のいみの解析空間を表わし,  $(X, \mathcal{O})$  と書いたら Serre のいみの解析空間 [11] を表わすとする. 又, 解析空間はすべて可算位相をもっているとする.

定義 1. 解析空間  $(X, \mathcal{O})$  は次の条件をみたすとす, Stein 空間という:

- (1).  $\Gamma(X, \mathcal{O})$  は  $X$  の点を分離する.
- (2).  $X$  は正則凸.

Stein 空間に対しては次の基本定理が成りた → [8].

Cartan の定理 A, B.  $\mathcal{F}$  は Stein 空間  $(X, \mathcal{O})$  上の連接層とすると,

- A. 各点  $x \in X$  に対して,  $\Gamma(x, \mathcal{F})$  は  $\mathcal{F}_x$  上  $\mathcal{F}_x$  と生成する.
- B.  $H^p(X, \mathcal{F}) = 0$ ,  $p \geq 1$ .

定義 2.  $\mathcal{F}$  は位相空間  $X$  上のベクトル空間の層とする. 次の条件を満足する開集合の近傍基  $\mathcal{U} = \{U\}$  が存在するとす,  $\mathcal{F}$  を Frechet 層という:

- (1). すべての  $U \in \mathcal{U}$  に対して  $\Gamma(U, \mathcal{F})$  は Frechet 空間の位相

が入る.

(2).  $U, V \in \mathcal{U}$ ,  $U \supset V$  なる制限写像  $r_{U,V}: \Gamma(U, \mathcal{O}_U) \rightarrow \Gamma(V, \mathcal{O}_V)$  は連続である.

定理1.  $(X, \mathcal{A}) \in$  解析空間とすると, すべての連接層に対して, 次の条件が成りたつように, Frechet の層の位相を一意的に入れることが出来る. 即ち任意の2つの連接層  $\mathcal{F}, \mathcal{G}$  に対して, 近傍基底があつて, すべての  $U \in \mathcal{U}$  に対して  $\Gamma(U, \mathcal{F}), \Gamma(U, \mathcal{G})$  は Frechet 空間であり, 任意の  $\mathcal{A}$  準同型写像  $g: \mathcal{F} \rightarrow \mathcal{G}$  に対して,  $g$  によりひきおこされた写像  $\Gamma(U, g): \Gamma(U, \mathcal{F}) \rightarrow \Gamma(U, \mathcal{G})$  は Frechet 空間の連接写像である [4, 5].

次の補題1はよく知られている.

補題1.  $D \in \mathbb{C}^n$  の領域とすると,  $D$  上の正則関数全体のなす環  $\Gamma(D, \mathcal{O})$  はコンパクト-環収束の位相で Frechet 空間となる. 従つて任意の正整数  $q$  に対して,  $\Gamma(D, \mathcal{O}^q) \simeq \{\Gamma(D, \mathcal{O})\}^q$  も Frechet 空間となる.

補題2.  $D \in \mathbb{C}^n$  の領域,  $\mathcal{F} \in \mathcal{O}^q$  の(必ずしも連接ではない) 解析的部分層とすると,  $\Gamma(D, \mathcal{F})$  は  $\Gamma(D, \mathcal{O}^q)$  で閉じている. 従つて  $\Gamma(D, \mathcal{F})$  は Frechet 空間である [4].

証明.  $f_r \in \Gamma(D, \mathcal{F})$  と  $f_r \rightarrow f \in \Gamma(D, \mathcal{O}^q)$  なる点列とすると,  $w \in D$  に対して,  $\mathcal{F}_w$  は  $\mathcal{O}_w^q$  の部分層で,  $f_{r,w} \in \mathcal{F}_w$ . 故に加群の局所用性定理 [2] によつて,  $f_w \in \mathcal{F}_w$  となる. 従つて  $f \in \Gamma(D, \mathcal{F})$ .

定理の証明  $x \in X$  とすると,  $x$  の近傍  $U_x$  と,  $U_x$  からある  $\mathcal{O}^k$  の多重円板  $(\Delta(0; r), \mathcal{O})$  の閉解析部分空間  $(V, \mathcal{R}')$  への同型写像とがある. ここに  $\mathcal{R}'$  は  $\mathcal{O}$  のあるイデアルの連接層  $\mathcal{J}$  をとって  $V = \text{supp}(\mathcal{O}/\mathcal{J})$ ,  $\mathcal{R}' = \mathcal{O}/\mathcal{J}|_V$  とかける. このような複素空間  $(V, \mathcal{R}')$  を  $(U_x, \mathcal{R})$  に対する局所イデアルとしよう.  $W_{r,x}$ ,  $0 < r < 1$  は  $V|_{\Delta(0;r)}$  のこの同型写像による原像とする. 集合  $\{W_{r,x}\}$  は  $X$  の開近傍基となる.  $\mathcal{J}'$  を  $\mathcal{J}$  の像とする. これは  $V$  上の連接解析層である.  $\tilde{\mathcal{J}}'$  を  $\mathcal{J}'$  の  $\Delta(0;r)$  へのトリビアルな接続とすると  $\tilde{\mathcal{J}}'$  は  $\mathcal{O}_{\Delta(0;r)}$  加群の連接層だから基本定理 A, B がつかえる; 任意の  $r < 1$  に対して,  $\tilde{\mathcal{J}}'$  は有限表現をもつ. 即ち次のような  $\mathcal{O}_{\Delta(0;r)}$ -加群の完全列が存在する:

$$(1) \quad 0 \longrightarrow \mathcal{R}_{\Delta(0;r)} \longrightarrow \mathcal{O}^q \xrightarrow{f} \tilde{\mathcal{J}}' \longrightarrow 0 \quad \text{on } \Delta(0;r).$$

従って任意の  $r' \leq r$  に対して完全列

$$(2) \quad 0 \longrightarrow \Gamma(\Delta(0;r'), \mathcal{R}) \longrightarrow \Gamma(\Delta(0;r'), \mathcal{O}^q) \xrightarrow{\tilde{f}} \Gamma(\Delta(0;r'), \tilde{\mathcal{J}}') \longrightarrow 0$$

がえられる. 空間  $\Gamma(\Delta(0;r'), \mathcal{O}^q)$  は Fréchet 空間である (補題 1).  $\mathcal{R}$  は  $\mathcal{O}^q$  の部分層だから  $\Gamma(\Delta(0;r'), \mathcal{R})$  は  $\Gamma(\Delta(0;r'), \mathcal{O}^q)$  の閉部分空間となる (補題 2). 故に商位相を入れて

$$\Gamma(W_{r,x}, \mathcal{J}) \simeq \Gamma(V|_{\Delta(0;r)}, \mathcal{J}') \simeq \Gamma(\Delta(0;r), \tilde{\mathcal{J}}') \simeq \frac{\Gamma(\Delta(0;r), \mathcal{O}^q)}{\Gamma(\Delta(0;r), \mathcal{R})}$$

は Fréchet 空間となる. (1) の完全列が存在するような  $W_{r,x}$  の全体は,  $X$  の近傍基  $\mathcal{U} = \{U\}$  を与える. 故に  $\mathcal{P}(\mathcal{U}, \mathcal{J})$  は Fréchet 空間となった. 明らかに制限写像は連続である. この位相は  $\mathcal{J}$  の表

現の与え方に無関係である. 実際別な表現があったとする:

$$0 \rightarrow \mathcal{P}(\Delta(0; r), \mathcal{O}^{\delta'}) \rightarrow \mathcal{P}(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta'}) \xrightarrow{\tilde{f}'} \mathcal{P}(\Delta(0; r'), \tilde{\mathcal{O}}^{\delta'}) \rightarrow 0$$

を対応する完全列とすると,  $\mathcal{P}(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta'})$  は  $\mathcal{T}(\Delta(0; r'), \mathcal{O})$  上の自由加群だから  $\mathcal{T}(\Delta(0; r'), \mathcal{O})$ -線型写像

$$(3) \quad \gamma: \mathcal{T}(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta'}) \longrightarrow \mathcal{P}(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta'})$$

で  $\tilde{f}' = \tilde{f}' \circ \gamma$  となるものがある. これは連続写像

$$\mathcal{P}(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta'}) / \mathcal{P}(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta'}) \xrightarrow{\psi} \mathcal{P}(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta'}) / \mathcal{P}(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta'})$$

をひきおこし, これは全単射である. 故に開写像の定理から  $\psi$  は位相写像となる. また,  $\phi: \mathcal{F} \rightarrow \mathcal{G}$  と層の準同型写像とし,

$\Delta(0; r)$  を  $\mathcal{D}$  で,  $\tilde{\mathcal{O}}^{\delta'}$ ,  $\tilde{\mathcal{G}}^{\delta'}$  が共に有限表現があるような多重円板とする:  $\mathbb{R}P^3$   $\mathcal{O}_{\Delta(0; r)}$ -加群の層の完全列

$$\mathcal{O}_{\Delta(0; r)}^{\delta} \xrightarrow{f} \tilde{\mathcal{F}} \rightarrow 0, \quad \mathcal{O}_{\Delta(0; r')}^{\delta} \xrightarrow{g} \tilde{\mathcal{G}}^{\delta'} \rightarrow 0.$$

すなわち, (3) におけるように  $\mathcal{T}(\Delta(0; r'), \mathcal{O})$ -線型写像  $\psi$  で次の図が可換となるものがある:

$$\begin{array}{ccc} \mathcal{T}(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta'}) & \xrightarrow{\gamma} & \mathcal{T}(\Delta(0; r'), \mathcal{O}^{\delta'}) \\ \tilde{f}' \downarrow & & \downarrow \tilde{g}' \\ \mathcal{T}(\Delta(0; r'), \tilde{\mathcal{O}}^{\delta'}) & \xrightarrow{\mathcal{T}(\Delta(0; r'), \phi)} & \mathcal{T}(\Delta(0; r'), \tilde{\mathcal{O}}^{\delta'}) \end{array}$$

故に開写像の定理から  $\mathcal{T}(\Delta(0; r'), \phi)$  の連続性がわかった. 定理証明終

さて,  $(X, \mathcal{A}) \in$  解析空間,  $\mathcal{F}$  を  $X$  上の連接層とすると  $X$  の局所有限な開部分空間  $X_{\nu} = \cup V_{\nu}$  による被覆で, 各  $V_{\nu}$  に対して,  $X_{\nu} \in \mathcal{A}$  する  $\mathbb{C}^n$  の開多重円板  $U_{\nu}$  とおける開部分空間へ写す解析的同型写

像が存在し, しかも各  $\nu$  に対して,  $U$  上の連接層系が有限な表現をもつように  $X_\nu \in \mathcal{U}$  とすることが出来る. このとき各  $P(X_\nu, \mathcal{F})$  上にはすでに Fréchet 空間の位相が入った. 次に自然な写射

$$\varphi: \mathcal{T}(X, \mathcal{F}) \longrightarrow \prod_{\nu} P(X_\nu, \mathcal{F}|_{X_\nu})$$

を与える. Fréchet 空間の可算積として  $\prod_{\nu} P(X_\nu, \mathcal{F}|_{X_\nu})$  は Fréchet 空間となる.  $(g_\nu) \in \prod_{\nu} P(X_\nu, \mathcal{F}|_{X_\nu})$  に対して,  $(g_\nu) \in \overline{\mathcal{I}_m \varphi}$  であるとは, 任意の  $k \geq 0$  と任意の  $x \in X_\lambda, X_\mu$  に対して,  $\mathcal{I}_m \varphi$  の元  $(f_\nu)$  があって,  $f_{\lambda x} - g_{\lambda x} \in m_x^k \mathcal{F}_x$ ,  $f_{\mu x} - g_{\mu x} \in m_x^k \mathcal{F}_x$  をいみする. ことに  $m_x$  は  $\mathcal{F}_x$  の極大イデアル. しかるに  $f_{\lambda x} = f_{\mu x}$  だから  $g_{\lambda x} - g_{\mu x} \in m_x^k \mathcal{F}_x$  である. これが任意の  $k$  に対して成り立つから Krull の定理より  $g_{\lambda x} = g_{\mu x}$ . このことは  $(g_\nu) \in \mathcal{I}_m \varphi$  をいみする. 即ち上の自然な写射  $\varphi$  で  $\mathcal{T}(X, \mathcal{F})$  の像は  $\prod_{\nu} P(X_\nu, \mathcal{F}|_{X_\nu})$  の閉部分空間である. 故に  $\mathcal{T}(X, \mathcal{F})$  は Fréchet 空間となる.  $X' \in \mathcal{X}$  の任意の閉部分空間とすると, 制限写射  $r_{X', X}: \mathcal{T}(X, \mathcal{F}) \longrightarrow \mathcal{T}(X', \mathcal{F})$  は明らかに連続となる. 故に次の系がえらゆべし.

系. 任意の閉部分集合  $W \subset X$  に対して,  $\mathcal{T}(W, \mathcal{F})$  は Fréchet 空間となる. 任意の閉集合  $U, W'$ ,  $U \subset W$  に対して制限写射  $r_{U, W}: \mathcal{T}(W, \mathcal{F}) \longrightarrow \mathcal{T}(U, \mathcal{F})$  は連続である.

### §3. 閉イデアールと昇算の定理

$(X, \mathcal{F})$  を解析空間とし,  $\mathcal{F}$  を  $X$  上の連接層とする. 以下

$\Gamma(X, \mathcal{A})$  は Fréchet 空間とする.  $A = \Gamma(X, \mathcal{A})$  とおく. 部分集合  $M \subset A$  に対して  $M$  によって生成された  $\Gamma$ - $\mathcal{A}$  の層を  $\mathcal{A}M$  で表わす. この層  $\mathcal{A}M$  の茎を  $\mathcal{A}_x M$  で表わす. 次の定理 2.3 及びその系は,  $X$  が  $\mathbb{C}^n$  の正則領域のとき Cartan [2] により与えられた.

定理 2.  $\mathcal{A} \in A$  の  $\Gamma$ - $\mathcal{A}$  とすると,  $\mathcal{A}$  は連接層である.  $(X, \mathcal{A})$  が Stein 空間なら,  $\Gamma(X, \mathcal{A})$  は  $A$  における  $\mathcal{A}$  の閉包  $\bar{\mathcal{A}}$  に等しい.

証明.  $\mathcal{A}$  の連接性は  $\mathcal{A}$  が局所有限生成的であることと示せば十分である.  $\mathcal{A}$  の生成元の数が有限なる問題は無い. ここで今,  $\mathcal{A}$  が一点  $x \in X$  で局所有限でなかったとする.  $\cup \mathcal{A}$  の相対コンパクト近傍とすると,  $\mathcal{A}$  の元の列  $f_1, f_2, \dots$  によって生成された層  $\mathcal{A} \cup \mathcal{A}_i$  とすると, 各  $\mathcal{A}_i$  に対して,  $\mathcal{A} \cup \mathcal{A}_i \subsetneq \mathcal{A} \cup \mathcal{A}_{i+1}$  となるものがある. しかしに  $\mathcal{A}$  の連接部分層の族  $\{\mathcal{A} \cup \mathcal{A}_i\}$  はつねに局所的に停留的であり得ないから [2] からこれは矛盾である. 故に  $\mathcal{A}$  は連接層となる. 次に  $\Gamma(X, \mathcal{A})$  が  $A$  の閉集合であることを示す. それには定理 1 の系と同様に, 自然な単射  $\varphi: \Gamma(X, \mathcal{A}) \longrightarrow \prod \Gamma(X_\nu, \mathcal{A}|_{X_\nu})$  において  $(g_\nu) \in \overline{\varphi \Gamma(X, \mathcal{A})}$  なら, 任意の  $k \geq 0$  と任意の点  $x \in X_\lambda \cap X_\mu$  に対して,  $(f_\nu) \in \varphi \Gamma(X, \mathcal{A})$  で,  $f_{\lambda x} - g_{\lambda x} \in m_x^k \mathcal{A}$ ,  $f_{\mu x} - g_{\mu x} \in m_x^k \mathcal{A}$  なるものが存在することに注意すればよい. 次に  $\Gamma(X, \mathcal{A}) \subset \bar{\mathcal{A}}$  を示せばよいのだが, それには, 次の 2 つの補題 (証明は省略)

に注意すれば、あとは Cartan の証明が平行にゆく。その1つは  $\mathbb{C}^n$  における加群の局所閉性定理が  $(X, \mathcal{O})$  に対して次の形で与えられることである。

補題3.  $\mathcal{M}$  を解析空間  $(X, \mathcal{O})$  の1点  $a \in X$  における茎  $\mathcal{O}_a^{\mathcal{O}}$  の部分加群とする。  $a$  のある近傍  $V$  に対して、  $g \in \Gamma(X, \mathcal{O}^{\mathcal{O}})$  が  $g|_V \in \Gamma(V, \mathcal{O}^{\mathcal{O}})$  の元で、点  $a$  での芽が  $\mathcal{M}$  に属するもののみ、  $\Gamma(V, \mathcal{O}^{\mathcal{O}})$  における Fréchet 位相での極限になっているとすると  $g_a \in \mathcal{M}$ 。

同様に多面体上の近似定理は次の形で与えられる。

補題4 (Weil-Oka の近似定理).  $(X, \mathcal{O})$  を Stein 空間、  $P \in X$  の Weil-Oka の多面体領域とすると、  $\bar{P}$  での正則な関数は  $X$  で正則な関数によって  $\Gamma(P, \mathcal{O})$  の Fréchet 位相で近似される。

系1.  $(X, \mathcal{O})$  を Stein 空間、  $\alpha \in \Gamma(X, \mathcal{O})$  の閉1- $\Gamma$ - $\mathcal{P}$  とすると  $\mathcal{O}$  の連接1- $\Gamma$ - $\mathcal{P}$  の層  $\mathcal{M}$  で、  $\alpha = \Gamma(X, \mathcal{M})$  なるものがある。

実際  $\mathcal{M} = \mathcal{O}\alpha$  とおけばよい。

系2.  $(X, \mathcal{O})$  を Stein 空間、  $\mathcal{M}$  を  $\mathcal{O}$  の連接1- $\Gamma$ - $\mathcal{P}$  の層とすると  $\mathcal{O}\Gamma(X, \mathcal{M}) = \mathcal{M}$  が成り立つ。従って  $\Gamma(X, \mathcal{M})$  は  $\Gamma(X, \mathcal{O})$  で閉じている、従って  $\Gamma(X, \mathcal{M})$  は Fréchet 空間である。

証明. 前半は  $(X, \mathcal{O})$  が Stein だから明らか。故に定理2より

$$\overline{\Gamma(X, \mathcal{M})} = \Gamma(X, \mathcal{O}\Gamma(X, \mathcal{M})) = \Gamma(X, \mathcal{M}).$$

系3.  $(X, \mathcal{O})$  を Stein 空間、  $\alpha \in A$  を閉1- $\Gamma$ - $\mathcal{P}$  とすると、  $\alpha$  は少なくとも1つの共通零点をもつ。



証明.  $\alpha$ にもし共通零点がなかったとすると  $\mathcal{H}\alpha = \mathcal{H}$  となるが,  $\alpha$ は閉イデアルだから  $\alpha = P(X, \mathcal{H}\alpha) = P(X, \mathcal{H})$  となり矛盾.

系4.  $(X, \mathcal{H}) \in \text{Stein}$  空間とすると,  $A$ の任意の閉極大イデアル  $\mathcal{M}$  は唯一つの共通零点をもつ. それを  $a$  とおくと

$\mathcal{M} = \{f \in A \mid f(a) = 0\}$  と表わせる.

証明. 今  $\mathcal{M}$  が2つの共通零点  $a, b$  をもつたとする.  $A$  は  $X$  の点を分離するから,  $A$  の元で  $f(a) \neq f(b)$  なるものがある.

$g(x) = f(x) - f(a)$  とおくとイデアル  $\mathcal{M}$  は固有イデアル  $\{ \mathcal{M}, g \}$  を含まれることになり,  $\mathcal{M}$  の極大性に反す. 後半は明らか.

定理3.  $(X, \mathcal{H}) \in \text{Stein}$  空間とすると  $P(X, \mathcal{H})$  の任意の有限生成イデアルは  $P(X, \mathcal{H})$  で閉じている.

証明は補題3を使って, [2]に平行して, 一樣収束という所を Fréchet 位相での収束におまかえることにより同様に証明される.

定理4.  $(X, \mathcal{H}) \in \text{Stein}$  空間とする.  $P(X, \mathcal{H})$  の極大イデアル  $\mathcal{M}$  は有限生成のとりに限り閉イデアルである.

証明. 定理3より十分性は明らか. 今  $\mathcal{M}$  が閉であるとすると, 定理2系4より唯一つの点  $a \in X$  で,  $\mathcal{M} = \{f \in P(X, \mathcal{H}) \mid f(a) = 0\}$  となるものがある. 定理2より層  $\mathcal{H}_{\mathcal{M}}$  は連接だから有限個の元  $f_1, \dots, f_r \in P(X, \mathcal{H})$  で,  $\mathcal{H}_a$  と  $\mathcal{H}_{\mathcal{M}}$  を生成するものがある. 集合  $X' = \{x \in X \mid f_1(x) = \dots = f_r(x) = 0\}$  は  $X' = X_0 \cup \{a\}$  とわかる.  $\mathcal{M} =$

に  $X_0$  は  $a$  を含まない (空かとも知れない) 解析集合である. 他方  $g|_{X_0} = 0$ ,  $g(a) = 1$  なる関数  $g \in \mathcal{F}(X, \mathcal{A})$  が存在する. したがって  $f_0 = g - 1$  は  $\mathcal{M}$  に属し,  $(f_0, f_1, \dots, f_k)$  は唯一つの共通零点をひとつ. 故に定理 B より関数  $f_0, f_1, \dots, f_k$  は  $\mathcal{F}(X, \mathcal{A})$  の  $\mathcal{M}$  を生成する.

定理 5 (井草 [9]).  $(X, \mathcal{A})$  を Stein 空間,  $\mathcal{M} \in \mathcal{F}(X, \mathcal{A})$  の極大イデアル  $\mathcal{P}$  であるとすると次の条件は同値である.

(1)  $\mathcal{F}(X, \mathcal{A})_{/\mathcal{M}} \simeq \mathbb{C}$  (位相環として同型)

(2)  $\mathcal{M}$  は  $\mathcal{F}(X, \mathcal{A})$  の閉極大イデアル.

(3)  $\mathcal{M} = \{f \in \mathcal{F}(X, \mathcal{A}) \mid f(a) = 0\}$  なる点  $a$  が存在する.

証明. (1)  $\rightarrow$  (2).  $\mathcal{M} \subsetneq I \subseteq \mathcal{F}(X, \mathcal{A})$  なるイデアル  $I$  があるとする. 関数  $f \in I$  と定数  $c \in \mathbb{C}$  で  $f \notin \mathcal{M}$ ,  $f - c \in \mathcal{M} \subset I$  なるものがある. したがって  $0 \neq c \in I$  であり  $\mathcal{F}(X, \mathcal{A}) = I$  となる. 故に  $\mathcal{M}$  は極大イデアルである. 他方位相環  $\mathbb{C}$  は Hausdorff 位相空間  $\mathcal{M}$  は  $\mathcal{F}(X, \mathcal{A})$  で閉じているから  $\mathcal{M}$  は閉である.  $\square$

(2)  $\rightarrow$  (3) は定理 2 系 3. (3)  $\rightarrow$  (1) は明らか.

## § 4. スペクトル論

定義 4. Stein algebra  $A$  のスペクトル  $S(A)$  とは, 位相環  $A$  から, 位相環  $\mathbb{C}$  の上への次のような位相環同型写像の集合をいう: 元  $\phi \in S(A)$  の近傍基を次のように定める.

$$\mathcal{V}(\phi, \varepsilon) = \{\gamma \in S(A) \mid |\phi(f) - \gamma(f)| < \varepsilon, f \in A, \varepsilon > 0\}.$$

定理5' (井草).  $(X, \mathcal{R}) \in \text{Stem}$  空間とし,  $A = P(X, \mathcal{R})$  とおく. このとき標準字像  $\alpha: X \longrightarrow S(A)$ ,  $\alpha(x) = \phi_x$ ,  $\phi_x(f) = f(x)$ ,  $f \in A$  が出来るがこの  $\alpha$  は位相字像である[5].

証明. まず  $\mathcal{R}$  の被約構造層  $\mathcal{Q}$  を考える.  $(X, \mathcal{R})$  を任意の解析空間とし,  $\mathcal{R}_x$  を  $\mathcal{R}_x$  の中環元全体よりなる  $\mathbb{T}$ - $\mathcal{P}$  とする.  $\mathcal{R} = \bigcup_{x \in X} \mathcal{R}_x$  は連接層となる. 何故なら局所として  $(V, \mathcal{R}')$  において,  $\mathcal{R} = \mathcal{J}'/\mathcal{I}'$  となるからである. ここに  $\mathcal{J}'$  は  $V$  上  $0$  になる関数層の層,  $\mathcal{I}'$  は  $(V, \mathcal{R}')$  を定める  $\mathbb{T}$ - $\mathcal{P}$  の層である.  $(X, \mathcal{R})$  の被約解析空間  $(X, \mathcal{Q})$  と,  $\mathcal{Q} = \mathcal{R}/\mathcal{R}$  で定める.  $A_r = P(X, \mathcal{Q})$  とおくと, 自然な全射準同型  $\beta: A \longrightarrow A_r$  が出来る.  $\mathcal{R} = \text{Ker } \beta$  とおくと  $\mathcal{R} = \{f \in P(X, \mathcal{R}), f(x) = 0, \forall x \in X\}$  とかける.

補題5.  $\mathcal{R}$  は  $A$  の Jacobson 根基に含まれる.

証明. そうでなかったと仮定し, 最大の  $\mathbb{T}$ - $\mathcal{P}$   $m$  をとって,  $m + \mathcal{R} = A$  とする. 従って,  $g \in m$ ,  $f \in \mathcal{R}$  で  $g + f = 1$  なるものがある.  $f_x$  は各点  $x \in X$  で中環元だから, 近傍  $U(x)$  と自然数  $N(x)$  がすべての  $n \geq N(x)$  に対して  $f^n|_U = 0$  となるものがある. 故に列  $\{f^n\}$  は  $A$  で  $0$  に収束する. 故に  $g = 1 - f$  は逆元  $\sum_{n=0}^{\infty} f^n$  を持つことになり  $1 \in m$  となりこれは矛盾である.

さて準同型  $\phi: A \longrightarrow \mathbb{C}$ ,  $\phi \in S(A)$  が与えられたとすると,  $\text{Ker } \phi$  は  $A$  の最大の  $\mathbb{T}$ - $\mathcal{P}$  だから補題5より  $\phi$  は  $A \xrightarrow{f} A_r \xrightarrow{\beta_r} \mathbb{C}$  と分解出来る. ここには全射だから開字像の定理により,

$\phi$  は連続である。故に  $S(A) = S(A_1)$  となる。故に証明は  $S$  の空間  $(X, \mathcal{O})$  の場合に帰着した。以下 [10] と同じである。証終。

注. Stein algebra  $A$  に対して,  $A$  の閉極大イデアルの集合を  $M(A)$  とおくと,  $M(A) = \{ \text{Ker } \phi \mid \phi \in S(A) \}$  となる.  $(X, \mathcal{O})$  が Stein 空間で  $A = P(X, \mathcal{O})$  なる  $S(A)$  と  $M(A)$  との間には 1対1 の対応がある. 逆に任意に与えられた Stein algebra のスペクトル  $S(A)$  から  $S(A)$  上の環の層  $\tilde{A}$  を定めて,  $(S(A), \tilde{A})$  に解析空間の構造を入れることが出来る. Forster [6] は次のことを証明した.

定理 6.  $A$  を Stein algebra とし, Stein 空間  $(X, \mathcal{O})$  の切断  $P(X, \mathcal{O})$  に同型とすると,  $(X, \mathcal{O})$  と  $(S(A), \tilde{A})$  は双正則同型である.

### §5. Stein 加群

$(X, \mathcal{O})$  を解析空間,  $\mathcal{M}$  を  $\mathcal{O}$ -加群の層とすると,  $P(X, \mathcal{M})$  は位相  $P(X, \mathcal{O})$ -加群となる.

定義 5. Stein algebra  $A$  上の位相加群  $M$  は, Stein 空間  $(X, \mathcal{O})$  と連続  $\mathcal{O}$ -加群の層  $\mathcal{M}$  と位相環及び位相加群としての同型写像  $\varphi: A \rightarrow P(X, \mathcal{O})$ ,  $\gamma: M \rightarrow P(X, \mathcal{M})$  があって, すべての  $f \in A$ ,  $m \in M$  に対して  $\psi(fm) = \varphi(f)\gamma(m)$  成るとし,  $M$  を Stein 加群という.

定理 2 及びその系の証明と同じ方法で次のことが示される.

定理 7.  $(X, \mathcal{O}) \in$  解析空間,  $\mathcal{M} \in$  連接層とする.  $M \in \mathcal{P}(X, \mathcal{M})$  の部分集合とすると  $\mathcal{M}$  の部分層  $\mathcal{M}|_M$  は連接層である.  $(X, \mathcal{O})$  が Stein 空間で,  $M$  が  $\mathcal{P}(X, \mathcal{M})$  の部分群なら  $\mathcal{P}(X, \mathcal{M}|_M)$  は  $M$  の閉包  $\bar{M}$  に等しい.

系 1.  $(X, \mathcal{O}) \in$  Stein 空間,  $\mathcal{M} \in$  連接層とする.  $\mathcal{M}$  の任意の連接部分層  $\mathcal{N}$  に対して,  $\mathcal{P}(X, \mathcal{N})$  は  $\mathcal{P}(X, \mathcal{M})$  で閉じている.

系 2. Stein 加群  $M$  の部分加群  $N$  は,  $N$  が Stein 加群であると  $\bar{N}$  に限り閉じている.

さて,  $(X, \mathcal{O}) \in$  解析空間,  $\mathcal{M}, \mathcal{N} \in X$  上の連接層とすると任意の開集合  $U \subset X$  に対して,  $\mathcal{P}(U, \mathcal{M}), \mathcal{P}(U, \mathcal{N})$  は Fréchet 空間であった. 任意の層の準同型写像  $\psi: \mathcal{M} \rightarrow \mathcal{N}$  に対して,  $\psi$  を誘起する写像  $\mathcal{P}(U, \psi): \mathcal{P}(U, \mathcal{M}) \rightarrow \mathcal{P}(U, \mathcal{N})$  は連続である. Forster (7) は次のことを証明した.

定理 8.  $(X, \mathcal{O}) \in$  Stein 空間,  $\mathcal{M}, \mathcal{N} \in X$  上の連接層とする.  $A = \mathcal{P}(X, \mathcal{O}), M = \mathcal{P}(X, \mathcal{M}), N = \mathcal{P}(X, \mathcal{N})$  とおく. 任意の  $A$ -線型写像  $\phi: M \rightarrow N$  に対して,  $\phi = \mathcal{P}(X, \psi)$  なる  $\mathcal{M}$  準同型写像  $\psi: \mathcal{M} \rightarrow \mathcal{N}$  が唯一存在する.

系 1. 上の定理と同じ仮定の下で, 任意の  $A$ -線型写像  $\phi$  は連続であり,  $\text{Im } \phi$  は  $N$  で閉じている.

証明. 上の定理より  $\mathcal{M}$  準同型写像  $\psi: \mathcal{M} \rightarrow \mathcal{N}$  で  $\phi = \mathcal{P}(X, \psi)$  なるものがあるから,  $\phi$  は連続である. 他方定理 B から,

$\phi(M) = T(X, \tau(M)) \subset T(X, \mathcal{H}) = N$  であり、 $\tau(M)$  は  $\mathcal{H}$  の連接部分層だから、定理 7 系 1 により、 $\phi(M)$  は  $N$  で閉じている。

系 2. (拡張された計算の定理). Stein algebra  $A$  上の任意の Stein 加群  $M, N$  に対して、任意の代数的同型写像  $\phi: M \rightarrow N$  は位相同型写像である。

さて、 $A$  は任意の環とし、 $M \in A$ -加群とするとイテパ化の原理により、 $M$  は環  $A' = A \oplus M$  のイテパ化となる。次の定理 [7] は Stein 空間  $(X, \mathcal{H})$  の構造層  $\mathcal{H}$  が 1 つの  $X$  において、十分沢山あることを示している。

定理 9.  $(X, \mathcal{H})$  を解析空間、 $\mathcal{H}$  を  $\mathcal{H}$ -加群の連接層とする。層  $\mathcal{H}' = \mathcal{H} \oplus \mathcal{M} \in \mathcal{H}'_2 = \mathcal{H}_2 \oplus \mathcal{M}_2$  で定めると付環空間  $(X, \mathcal{H}')$  は解析空間となる。 $(X, \mathcal{H})$  が Stein 空間ならば、 $(X, \mathcal{H}')$  も Stein 空間である。

この定理を便に  $\mathcal{H}$  加群に内可算定理はイテパ化に内可算定理に還元される。故に定理 3 から次の定理がえられた。

定理 3'.  $(X, \mathcal{H})$  を Stein 空間、 $\mathcal{H} \in X$  上の連接層とする。 $\mathcal{F}(X, \mathcal{H})$  の任意の有限生成  $\mathcal{F}(X, \mathcal{H})$ -部分加群は  $\mathcal{F}(X, \mathcal{H})$  で閉じている。

## References

- [1] N.Bourbaki, Topologie générale, Chap.3, Herman, 1960.
- [2] H.Cartan, Idéaux et modules de fonctions analytiques de variables complexes, Bull.Soc.math.France, 78(1950), 29-64.
- [3] \_\_\_\_\_, Séminaire, E.N.S, 1951/52.
- [4] \_\_\_\_\_, Séminaire, E.N.S, 1953/54.
- [5] O.Forster, Primärzerlegung in Steinschen Algebren, Math. Ann. 154(1964), 307-329.
- [6] \_\_\_\_\_, Uniqueness of topology in Stein algebras, Function Algebras, Proc. Intern. Symposium, Tulane, 1965.
- [7] \_\_\_\_\_, Zur Theorie der Steinschen Algebren und Modulen, Math.Z. 97(1967), 375-405.
- [8] H.Grauert, Ein Theorem der analytischen Garbentheorie und die Modulräume komplexer Strukturen, I.H.E.S. No.5, Paris, 1960.
- [9] J.Igusa, On a property of the domain of regularity, Mem. Coll. Sc. Univ. Kyoto, 27(1952), 95-97.
- [10] R.Iwahashi, A characterization of holomorphically complete spaces, Proc. Japan Acad, 36(1960), 205-206.
- [11] J.P.Serre, Géométrie algébrique et géométrie analytique, Ann. Inst. Fourier, 6(1960), 1-42.
- [12] \_\_\_\_\_, Prolongement de faisceaux analytiques cohérents, Ann. Inst. Fourier, 16(1966), 363-374.